帝塚山大学短期大学部紀要　第39号　一～九（二〇〇二）

謡曲『船弁慶』の周辺とその底流

小林美和

一

人間の執心の激しさが、芸術の主題となり得たのはいつの頃からであろうか。唐突にそんな問いかけをしてみたくなるのは、能の世界において、人間の内面に巣食う執心の数々が、純粋な美としてあまりに見事に昇華されているからである。

深く傷ついた魂は永遠に滅び去ることなく、繰り返し繰り返し、一つの舞台の上に立ち現れてくる。そこに登場する魂が語る苦悩の一つ一つは、けっして現代のわれわれとも無縁ではない。むしろ、それがその本質においてわれわれの苦悩と同一のものであるゆえに、永遠の輝きを失うことはない。

ここに取り上げる謡曲『船弁慶』については、

「舟弁慶」はすぐれた能であるが、その優秀性はしょせんショウとしてのおもしろさによるのであって、観客に深刻な感銘を与える豊かな劇的内容はない。[1]

などと評されているように、ことに後場の戦闘場面の壮烈さなどから、スペクタクルとしての側面が注目されてきたといってよい。しかし、その本作においても、

一瞬、耳をつんざくような早笛の囃子に疾風怒濤が猛然と襲いかかるとみるや、揚幕がさっとあがり、黒頭をおどろに乱した後シテ知盛の幽霊が長刀を手に走り出る。凄烈な幽霊の出現であるが[2]……。

という的確な状況描写に示されるようなおどろおどろしい見せかけの向こうに、怨霊たちの魂の苦悩が響いてくるのも、またたしかな事実である。

この知盛とは、いうまでもなく平清盛の四男、源平の合戦で壇ノ浦の海に身を沈めた平知盛のことである。『平家物語』の読みの歴史の中で、近代に至ってこれほど新たな脚光を浴びた人物は他にいないであろう。その代表格ともいうべきものは、歴史学者石母田正の著作[3]であろう。

それは、勝敗の帰趨が決した壇ノ浦合戦において、なおも戦いに狂う平教経を「いたう罪なつくり給そ」と諌め、最後には「見るべき程の事は見つ」という言葉を残し、海に身を投じた知盛について、『平家物語』作者の運命観の代弁者と位置付けるというものであった。知盛は透徹した目で一族の運命を予言すると同時に、一種の諦観をもっ

て一族と運命を共にした。しかも、この知盛は、物語の中でこのような超越的立場を付与されているだけではなく、己の命を守るために我子を見殺しにしたという体験から、人間としての自分の内面の弱さを十分に認識する人物として描かれている……というものであった。

石母田のこうした読みは、物語の中に平知盛という新しいヒーローを発見したというにとどまらず、以後の『平家物語』の読みに多大な影響を与えたといってよいであろう。

さて、冒頭に述べた憤怒に荒れ狂う能の知盛と、石母田によって提示された諦観に満ちた知盛とはどのような関係にあるのであろうか。石母田のこの論は、もっぱら語り本の『平家物語』によってなされている。語り本の代表的テキスト覚一本が成立したのが応安四年（一三七一）、謡曲『船弁慶』の作者観世信光の活躍期は十五世紀後期から十六世紀前期にかけてのことである。単に成立時期のみをとらえれば、謡曲『船弁慶』は覚一本『平家物語』の後裔に属する。この小論は『平家物語』と謡曲との具体的関係を論じようとするものではないが、ここで確認しておきたいのは、謡曲『船弁慶』は『平家物語』証本が確立して、世に語り本『平家物語』が流布してはるか後の作品だということである。

あら珍しや、いかに義経、思ひも寄らぬ浦波の声をしるべに出舟の、声をしるべに出船の、知盛が沈みしその有様に、また義経をも海に沈めんと、夕波に浮かめる長刀取り直し、巴波の紋あたりを払ひ、潮を蹴立て、悪風を吹き掛け、眼もくらみ、心も乱れて前後を忘ずるばかりなり[4]

右は知盛の怨霊が海上に立ち現れる場面の一節である。知盛は亡霊となった今も義経を海底に沈めようと、狂おしくもまた憤怒に満ちた表情で立ち現れる。そして義経との戦闘を経て、弁慶の呪文によって退散させられた後、なおも、義経一行の船に追いすがるという執心の激しさをみせている。

この点については、たとえば、

知盛のイメージも、平家物語からうけるものとは違う。たしかに彼は平家を代表するにふさわしい人物だが、怨霊などになって、仇をなすような人間ではない。どちらかといえば、「船弁慶」には、教経の方が似つかわしい。知盛のように沈着な人間は、劇にも舞踊にもなりにくいことを、世阿弥は熟知していたと思う。[5]

という批評にみられるように、謡曲『船弁慶』の作品評価ともかかわってくる問題であろう。観世信光は知盛を平家亡霊の代表者とすることにより、その作劇に失敗したのではなかったか。つまり信光は『平家物語』が創造した知盛像を受け止められなかったのではなかったのかと……。

平家怨霊は平家の滅亡後、人口に膾炙したところであり、六甲山の沖合に怨霊が出現したとしても、何の不思議もなく、後世それが船幽霊の民俗[6]と結びついて敷衍したとしても問題ではない。ただ、その代表者がなぜ知盛であらねばならないのか、『平家物語』の知盛を知る者としては理解がむつかしいというところである。

この点について、伊藤正義氏[7]は、謡曲『船弁慶』がその構想上、『義経記』と最も密接な関係があることを認められた上で、

知盛の亡霊を、壇の浦の海底に沈んだ平氏の怨霊のいわば代表者に仕立てたのは、作者の手柄に帰するものであろう。

と、謡曲作者の創意をここに指摘されている。

筆者としてはこれについてはやや異論もあり、以下、小論ではこの点を中心に先行軍記作品と謡曲『船弁慶』の関係について考えてみたい。

二

ここでひとまず、謡曲『船弁慶』の内容を概観しておきたい。本作は、兄頼朝と仲違いした源義経が、その追討の手から逃れるべく、西国に向けて、摂津国尼崎の大物浦から船出をする場面を作品に仕立て上げたものである。作者についてはすでに触れたが、『能本作者註文』等に、観世小次郎信光作とあるところから、信光作者説が有力となっている。この『船弁慶』と内容上関連の深い軍記作品としては、『平家物語』と『義経記』の二作品が挙げられると考えられる。さらに、室町期から江戸期にかけて流行した芸能、幸若舞曲の「四国落」なども、これと同材の作品である。

さて、謡曲『船弁慶』の内容としては、前後半が独立した場面を構成している点に特徴が見られる。つまり、前半は、弁慶が、義経に同行してきた静を都に帰らせようと説得する場面。しかし、静は、それが義経の真意に発するものかどうかを確認すべく、義経との面談を申し出て、それが義経の真意であると確認するや、「渡口の郵船は」云々の朗詠をしながら、舞を舞い、義経の前途平穏を予祝するという内容となっている。それに対して、後場は、すでに述べたように、シテが前場の静御前から平知盛に変わり、船出をした義経一行に、知盛の悪霊が襲いかかり、義経と戦闘するが、最後には弁慶の読誦する呪文の威力によって退散するという内容となっている。

三

知盛の怨霊について言及する前に、前場に登場する静御前についてみておきたい。静御前は、歴史上とても有名な女性であり、ことに義経との吉野山での道行はよく知られた場面である。しかし、どうしたわけか、『平家物語』では、この静御前はそれほど顕著な活躍をみせていない。

判官（略）大物の浦より船に乗ッて下られけるが、折節西の風はげしく吹き、住吉の浦にうちあげられて、吉野の奥にぞこもりける。吉野法師に攻められて、又都へ帰り入、北国にかゝッて、終に奥へぞ下られける。都よりあひ具したりける女房達十余人、住吉の浦に捨置きたりければ、松の下、まさごのうへに、袴踏みしたき、袖をかたしいて泣臥したりけるを、住吉の神官共憐んで、みな京へぞ送りける。凡判官のたのまれたりける伯父信太先生義教・十郎蔵人行家・緒方三郎維義が船共、浦々島々に打よせられて、互にその行ゑを知らず、忽に西の風吹きける事も、平家の怨霊のゆへとぞおぼえける（巻十二、判官都落）[8]。

これは、義経が五百余騎を率いて、大物の浦から船出し、西国を目指したが、折から平家の怨霊の仕業と思われる強風が吹き荒れ、船は難破、住吉の浜に打ち上げられてしまったという件である。この中で、義経は、都から連れてきていた女房たち十人余りを住吉に置き去

りにして、吉野山に籠ったと語っており、静御前を吉野山に同行したことはもちろんのこと、ここでは静の名前すらでてこない。

それでは、『平家物語』には静御前は登場しないのかというと、そうでもない。同巻十二には、頼朝の命によって、義経暗殺の刺客、土佐坊正俊が義経を襲う場面がある（判官土佐房被斬）。この中では、

判官は、磯禅師といふ白拍子のむすめ、しづかといふ女を最愛せられけり。しづかもかたはらを立さる事なし。しづか申けるは、「大路は皆武者でさぶらふなる。是より催しのなからんに、大番衆の者ども、これほどさはぐべき様やさぶらふ。あはれ是はひるの起請法師のしわざとおぼえ候。人をつかはして見せさぶらはばや」とて、六波羅の故入道相国の召しつかはれけるかぶろを三四人つかはれけるを、二人つかはしたりけるが……。

というように、静御前は、いち早く正俊の襲撃を察知し、義経に知らせるという機敏な働きをみせている。しかし、語り本『平家物語』では、静の名はここしか登場してこない。室町時代の作品とされる『義経記』や、それに先行する鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』でさかんに活躍し、悲劇のヒロインとなっている静御前に対して、語り本『平家物語』は意外に冷淡な扱いをしていることになる。

よく知られるように、『平家物語』は琵琶法師の語り台本の系統に属する語り本と、それ以外の系統に二分される。一般に流布した語り本系統の『平家物語』が静御前に対して意外に冷淡なのは、一面興味深いことである。

しかし、近時現存『平家物語』中の古態本としての評価が定まりつつある延慶本『平家物語』となると、少し事情が異なってくる。延慶本六末「土佐房昌俊判官許へ寄事」には、同じように義経に異変を告げるし閑（しづか）が登場するが、その後、土佐坊正俊（延慶本では昌俊とする）の夜討を受けた時、これを侮って泰然とする義経に対して、

閑「物ヲバアナヅラヌ事ニテ候ゾ」トテ、鎧ヲ取テ判官ニ投懸タリ。其比判官ハ灸治ヲシ、ミダシタリケレドモ、鎧取テ打キテ、大刀引サゲテ出ラレタリ（六末　土佐房昌俊判官許へ寄事）[9]。

と、これを叱咤する気丈な女としての一面を描いている。

さらに、先程の大物の浦での難破の場面においては、語り本と同じように、女房たちが住吉浜に捨てられたと記しているが、延慶本のみはそれに続いて、静御前について言及しているのは注目される。すなわち、

其中ニイカヾシタリケム、磯ノ禅師ガ娘ニ、閑ト云白拍子バカリゾ、判官ニ付テ不見ケル。

とした後、次のようにその消息を述べる。

義経僅ニ三十余騎ノ勢ニテ吉野山ニ籠ニケリ。彼山大雪ノ中ナレバ、オボロケニハ人カヨフベクモナシ。京ヨリ相グシタリシ女房共モ、皆大物ノ浜ニ捨置ツ。磯ノ禅師ガ娘ニ閑ト云シ計ゾグシタリケル。彼大雪ノ中ヘ行ベキヤウナカリケレバ、判官閑ニ宣ケルハ、「イヅクヘモグシ奉リタケレドモ、カヽル雪ノ中ナレバ、女房ノ身ニテハ叶マジ。我身モ通ルベシトモ覚ヘネバ、自害ヲセムズルナリ。此ヨリトク〳〵都ヘ行ベシ」ト宣ケレバ、閑泣々申ケルハ、「イカニ成給ハム所マデモ、我命ノアラムカギリハグシ給ヘ。ステラレ奉テ堪忍ベシトモ覚ヘズ」トテ泣ケレバ、「誰モサコソハ思ヘドモ、カヽル大雪ナリ。不力及。命アラバ尋給ヘ。我

モ尋ム」トテ、金銀ノタグヒトラセテ、郎等ニグセサセテ送ニケリ。郎等此宝ヲトラムトテ、打捨テ失ニケレバ、吉野ノ蔵王堂ヘタドリ参タリケルヲ、吉野法師哀ミテ京ヘ送ケリ（六末　九郎判官都ヲ落事）。

延慶本は、このように義経と静御前の吉野行と大雪の降り積もる山中での別離を描いている。このあたりの叙述は、まさに室町期の作品、『義経記』の描写を彷彿とさせるところである。『平家物語』は、けっして吉野静を語っていないわけではないということがこれによって知られるわけであるが、興味深いのは、『平家物語』諸本の中でも、延慶本というテキストが、この場面を描いている点だと思われる。

周知のように、『平家物語』のテキストはとても数多く、それらの中で、どのテキストが最も古い内容を持っているかという問題が、ことに戦後の『平家物語』研究の世界では、最大の関心事であったといってよいと思われる。そうした中で、最近の研究においては、この延慶本が鎌倉期の古い『平家物語』の内容を伝えているということが大体において認められてきている。

したがって、あの有名な静御前の吉野彷徨の物語は、けっしてそんなに新しいものではないということは指摘できるのではないかと思われる。もっとも、『吾妻鏡』もすでに吉野山の静を描いているわけで、問題は必ずしも『平家物語』と『義経記』の関係というわけでもない。しかし、『吾妻鏡』と延慶本の成立年代の先後関係ということになれば、必ずしも『吾妻鏡』が先だとばかりはいいきれない。このあたりもおもしろいところだと思われる。つまり、『吾妻鏡』に先行して、静御前の吉野彷徨を語る文芸が存在していたという蓋然性はきわめて高いということであろう。少なくとも延慶本は早い段階において吉野静を語る文芸を掬い取っている。

語り本『平家物語』はなぜ吉野静について語らなかったのか。その問に対する解答は、今のところ保留としたいが、ここで確認しておきたいのは、語り本『平家物語』が掬い取らなかった義経関連文芸の断片がここに見られるということであり、『平家物語』を題材とする謡曲作品を考えるに際しても、語り本のみを対象とすることにはいささか注意が必要ということを示唆しているということである。

ところで、話を謡曲『船弁慶』に戻すと、こちらの静御前は、大物浦で義経と別れることになっている。とても大胆な構成ともいえるが、しかしよく考えてみれば、これには作劇上の必然性があると思われる。というのも、『平家物語』や『義経記』では、大物浦を船出した義経の船は、平家の怨霊によって難破し、その結果吉野山に落ちていくということになっている。しかし、謡曲では、平家の怨霊は弁慶の唱える呪文によって退散、したがって、義経一行の航海は続行されるということになっているので、このあたりが基本的に違う。要するに、弁慶による怨霊払いの成功という帰結からさかのぼると、船の難破による義経と静御前の吉野行というモチーフはあり得ないわけである。また、前場における静御前の予祝の芸能も後場のテーマと響き合うものであって、しばしば指摘されるような作品構成の破綻を示すものとは考えられない。その意味で、曲名の「船弁慶」は、本作のテーマを余すことなく伝えているといえる。そして、さらにいえば、このことは、謡曲の芸能としての性格に根ざすものであろうと思われる。

四

静に別れを告げた義経は、西国をめざして船出をする。しかし、その眼前、海上には壇ノ浦で滅んだ平家一門の亡霊が、安徳天皇をはじめとして、雲霞のごとく浮かんでいる。義経は、これら平家の怨霊を前にして、

今さら驚くべからず。たとひ悪霊恨みをなすとも、そも何事のあるべきぞ。悪逆無道のその積もり、神明仏陀の冥感に背き、天命にそむきし平氏の一類……。

と、少しもひるむことなく、その滅びが神明仏陀および天命に背いたが故の当然のなりゆきであったことを喝破する。このあたりの叙述は、『義経記』と比較していかがか。

船が播磨灘に近づいた頃、黒雲が書写山の西方から湧き上がり、義経はこれを大風の襲来とみる。これに対して、弁慶は、平家の「悪霊・死霊」であることを示唆し、黒雲に向かって、口上を述べながら、弓矢を散々に射かけると、黒雲はかき消すように失せてしまった。しかし、その後本物の黒雲が襲い掛かり、大風で船は難破してしまった。これが『義経記』の語るところである。この叙述によれば、結果的に平家の怨霊は、船の難破に何の影響もなかったことになる。このことは、中世軍記物の世界を、その本質的部分において規定してきた怨霊思想から『義経記』が、ある程度自由であることを指し示しているといってよいのかもしれない。

この点からすれば、同じく義経の西国落ちに題材を採った幸若舞曲「四国落」[10]は、

かゝる刻に平家の悪霊たち、その数あまたゆしゆつせられけれども、弁慶に加持せられ、皆海底に入給ふ。

と、弁慶の唱える真言の呪文によって平家の怨霊が退散したとしており、大風との関連を説いているのは、いくぶんかでも『平家物語』の思想の名残を伝えるものであろう。

謡曲『船弁慶』の語る、義経一行の船出は、不穏な空気に満ちている。

渡口の郵船は風静まつて出づ。波頭の謫所は日晴れて見ゆ。

という静御前の予祝歌の効もなく、突如武庫山の山上に立ち現れた黒雲は、嵐と化して船に吹き寄せる。これを見た船頭は、

いかに武蔵殿、このおん舟にはあやかしが憑いて候。

と、船が変化の者にとり憑かれていると騒ぎたてる。

それを制したのは弁慶であったが、しかし、その弁慶の眼前に、平家の怨霊たちが忽然と姿を現わす。

あら不思議や、海上を見れば、西国にて滅びし平家の一門、おのおの浮かみ出でたるぞや。かかる時節を窺ひて、恨みをなすも理なり。

平家の怨霊たちの出現が一種の必然性を以って演出されているとみてよい。その意味で、

主上を始め奉り、一門の月卿雲霞のごとく、波に浮かみて見えたるぞや。

という風景は、一曲の、ことに後場の主題を象徴的に表すものとみてよいであろう。弁慶の呪文によって、悪霊はいったん遠のくものの、

『義経記』や幸若「四国落」と異なり、平家の怨霊は、逃げる一行に激しく追いすがる。やむなく船を汀に寄せるも、

なほ怨霊は、慕ひ来たるを、追つ払ひ祈り退け、また引く潮に揺られ流れ、また引く潮に揺られ流れて、跡白波とぞなりにける。

という次第となる。

さて、注目したいのは、冒頭で述べたように平知盛の怨霊が後シテとして登場してくる点である。なお、平家の怨霊の中で、固有名詞が示されるのは、この知盛一人である。知盛の怨霊は、

そもそもこれは桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり。

と名乗って登場してくる。そして、

あら珍しやいかに義経、思ひも寄らぬ浦浪の、声をしるべに出舟の、声をしるべに出舟の、知盛が沈みしその有様に、また義経をも海に沈めん。

と、長刀を持って義経に襲いかかってくる。壇ノ浦合戦において知盛自身が海中に沈んだように、義経を海中に沈めてやろうというのである。繰り返し引用すれば、

夕波に浮かめる長刀取り直し、巴波の紋あたりを払ひ、潮を蹴立て、悪風を吹き掛け、眼もくらみ、心も乱れて、前後を忘ずるばかりなり。

というように、知盛の亡霊は、執心の激しさのあまり、惑乱の体を示す。

ところで、ここに登場する平家の怨霊が知盛のそれである必然性、もしくは歴史的文脈の淵源はどこにあるのであろうか。いうまでもなく、『平家物語』にその名をとどめる平家の武将は数多い。その中で、ここにクローズアップされるのが知盛その人であることの背後にはどのような事情が潜んでいるのであろうか。知盛は、清盛の四男、源平合戦時においては、棟梁たる兄宗盛の補佐役として、いわば平家軍略の中枢を担っていたと考えられる。その意味では、知盛が平家一族を代表して、その亡霊が登場することに何ら問題はないのかもしれない。しかし、中世の平家能の世界が、『平家物語』を主要な基盤とするとするならば、事情はいくぶん複雑となってくる。

『平家物語』における知盛の像は、一面、兄重盛ほどではないが妙に分別くさいところがある。一谷合戦において、息子知章を見殺しにして生き延びた知盛は、兄宗盛に向かって、「よう命はおしひ物で候けりといまこそ思ひ知られて候へ」と涙にくれる。愛する息子を見殺しにするという、いまさら悔やんでも悔やみきれない自らの行為が、彼をして人間というものの洞察へと導く。その意味で知盛は内省の人である。しかし、同時に彼が激情の人であることを見逃してはならないであろう。「袖をかほにおしあててさめ〴〵と泣給」という表現から読み取られるのは、その悔恨の深さと感情の激しさであろう。

もとより、歴史上の知盛がこのような人物であったかどうかということよりも、『平家物語』作者が、知盛をしてこのように語らせているところに問題の所在がある。そしてこの際注意しておかねばならないことは、一口に『平家物語』とはいっても、諸本によってこの知盛造形のあり方が、諸本によって微妙に異なるという点である。

たとえば今日もっともポピュラーな語り本の覚一本『平家物語』にあっては、前述したように、石母田正が知盛を「運命の洞察者」と評した性格が前面に出ているように思われる。石母田によれば、この知

盛は『平家物語』作者によって、運命の洞察者としての役割を与えられており、最後は、「見るべき程の事は見つ」という言葉を残して、海中に身を投げた人物である。石母田は、この「見るべき程の事は見つ」という知盛の言葉にとても重い意味を見出し、そこに運命の洞察者としての一種諦観のようなものを読み取っている。これは、先に紹介したように、語り本『平家物語』を素材とした、すぐれた読みとして、今日の『平家物語』理解にあたえた影響には、はかり知れないものがある。

しかし、これが前述した延慶本となると、語り本のそれとはかなり異質な知盛像が見受けられる点に留意しておきたい。いわば、激情の人としての知盛像が前面にでてくる。結論からいえば、わたしは、謡曲『船弁慶』のおどろおどろしく激しい知盛像の背後には、証本として文学的に洗練された語り本『平家物語』の世界ではなく、こうした延慶本的な『平家物語』世界が広がっているのではないかと考えてみたい。

延慶本の知盛像には、物語作者のより濃密な共感が込められているように思われる。延慶本における知盛は、「弓矢取ル家ハ名コソ惜候」という本人の言が端的に示すように、何よりも武門の名誉を重んじる人物として描かれており、物語の終局壇ノ浦においても決して弱弱しい諦観などを吐露はしない。知盛は死の直前まで義経一人の命を狙い続けるのである。

①新中納言知盛宣ケルハ、「度々ノ軍ニ九郎一人ニ被責落ヌルコソ安カラネ。今ハ運命尽ヌレバ、軍ニ可勝トハ思ハズ。何ニシテモ九郎一人ヲ取テ海ニ入ヨ（六本　平家長門国檀浦ニ付事）。

②新中納言知盛、船ノ舳ニ立出テ宣ケルハ、「軍ハ今日ゾ限リ。各少モ退ク心アルベカラズ。天竺振旦日本我朝ニモナラビナキ名将勇士ト云ドモ、運命ノ尽ヌル上ハ、今モ昔モ力及ヌ事ナレドモ、名コソ惜ケレ。穴賢東国ノ奴原ニ悪クテ見ユナ。イツノ料ニ命ヲ可惜ゾ。何ニモシテ九郎冠者ヲ取テ海ニ入ヨ。今ハ夫ノミゾ思事（六本　檀浦合戦事付平家滅事）。

一族の滅亡を目の前にして知盛が繰り返し下知しているのは、ただ義経を海中に葬ることである。実は、知盛は①に続く場面でも「ナジカハ九郎一人不可討」と義経殺害への執念を示しており、それが彼に残された最後の望みであった。語り本『平家物語』には、このような叙述は一切みられない。それでは、知盛はなぜ義経に対する執心をそこまで燃え上がらせたのか。それは、①の引用文の示すところからは、「度々ノ軍」において、義経一人の戦略にしてやられたということ、そのことが同じ武門の一人として、知盛の誇りをいたく傷つけたことが窺われる。

このように、語り本『平家物語』とちがって延慶本は、知盛の義経に対する飽くなき執心を物語っている。謡曲『船弁慶』において、知盛の怨霊が登場し、義経に激しく襲い掛かるという場面も、こうした文脈からすれば、決して唐突でも不自然でもない。謡曲『船弁慶』における知盛の怨霊出現の背景に、こうした延慶本的『平家物語』世界があったとは考えられないであろうか。

五

謡曲『船弁慶』は弁慶による平家の怨霊払いを主題に据えることで、史実はもとより、『平家物語』や『義経記』といった先行作品の内容とも相違する異色の作品と成り得ていると思われる。ただ、『平家物語』との関係でいえば、『平家物語』にも証本化された語り本とは異質な世界を示すものがあったことを見落としてはならないと考える。謡曲『船弁慶』の知盛像からは、そうした異質な『平家物語』世界との交感が垣間見られるのではないか。

文芸の大きな流れからすれば、それは或いは俗なる世界のものであるかも知れない。証本としての語り本『平家物語』がより洗練された特権的世界を獲得していく過程で切り捨てたもの。それは決して少なくはなかったと思われる。俗なるものの目からすれば、知盛の執心は激しく、怨霊となるにふさわしい人物であったとも思われる。

注

(1) 金井清光『能の研究』参照。
(2) 注(1)に同。
(3) 石母田正『平家物語』
(4) 以下、謡曲『船弁慶』の引用は、新潮社版日本古典集成『謡曲集』下により、句読点を付すなど読みやすくした。
(5) 白洲正子『謡曲平家物語』「船弁慶」の項参照。
(6) 関山守弥「謡曲『舟弁慶』のもう一つの解釈」(『昔話伝説研究』第七号)。
(7) 注(4)書物の作品解題の項参照。
(8) 引用は新日本古典文学大系『平家物語』に翻刻された高野本による。
(9) 延慶本の引用は、勉誠社翻刻本による。
(10) 「四国落」の引用は、笹野堅篇『幸若舞曲集』本文編による。

〈付記〉本稿は、平成十一年度立命館公演における講演草稿に若干加筆したものである。